



TITLE:

[書評] 張 伯偉著 『作為方法的漢文化圈』

AUTHOR(S):

堀川, 貴司

CITATION:

堀川, 貴司. [書評] 張 伯偉著 『作為方法的漢文化圈』 . 中國文學報 2012, 82: 167-174

ISSUE DATE:

2012-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/217693>

RIGHT:

張
伯偉著

『作爲方法的漢文化圈』

堀 川 貴 司

慶應義塾大學

近年の中國における、非中國漢文文獻の研究の進展には目を見張るものがあるが、その強力な推進者のひとりである張伯偉氏がここ數年の成果を一書にまとめた。本書『方法としての漢文化圈』である。

全九篇からなる本書の内容は、唐代から近代まで、中國・朝鮮・日本にわたる廣汎なもので、そのいちいちについて論評することは、日本漢文學研究が専門である評者の手に餘る。内容の紹介と、現在の日本における關連研究や類似の作品・作家等を舉げることで責を塞ぎ、間接的に張氏の研究の意義を照らし出せればと思っている。

書 評

* * *

まず序章として書名と同題の文章が置かれている。著者は、ヨーロッパの學問體系の影響下で形成されてきた一九世紀以降の中國における學問を反省する契機としてポール・コーエン『知の帝國主義 オリエンタリズムと中國像』（邦譯書名による）と溝口雄三『方法としての中國』を舉げる。いずれも西洋の眼を通して中國を見る事への批判であるが、特に後者の、江戸時代以來の日本漢學（日本文化から見た中國）とも西洋式中國學とも異なる、第三の道中國の内部からその原理を見出すことを目指す姿勢に共感を表明する。

しかし著者はすぐさま、その姿勢と傳統的な中國中心主義（中華思想と言ひ換えてもよいだろう）との混同に警告を發し、中國人として、自己を見る視點、他者を見る視點、そして他者の眼を通して自己を見る第三の視點を持つ必要があると述べる。この第三の視點の設定において有益な資料となるのが、中國以外の地域において成立した漢文文獻、

著者いうところの「域外漢籍」である。

著者はさらに一步進めて、陳寅恪の言を引きながら、それらの資料を單に中國理解のために奉仕させる補助的役割とみなすのではなく、域内漢籍と同等の價值を認め、相互に參照することによって、より大きな文化圏——すなわち漢文化圏全體の研究に資することを目標としている。

なお、この「導言」はもと《中國文化》二〇〇九年秋季號に掲載され、また『東アジア漢籍交流シンポジウム：京都豫稿集——「域外漢籍」の研究價值を考える——』（二〇〇九年一月一四日開催、いわゆる「にんぶろ」のうち靜永健班主催のもの）に大淵貴之氏の翻譯を付して收められる。そこでは、具體的な研究上の視點として、典籍の流傳、人物の交流、イメージの變遷、の三つを挙げ、それぞれ著者自身の研究を紹介しているが、本書收録の際、所收論文との重複を避けるためであろうか、この部分は削除されている。

* * *

以下、個別の論文について見ていこう。九本のタイトル

は以下の通り。（假に通し番號を付す）

- 1 東亞文化意象的形成與變遷——以文學與繪畫中的騎驢與騎牛爲例
- 2 漢文學史上的一七六四年
- 3 朝鮮時代女性詩文集編纂流傳的文化史考察
- 4 論唐代的詩學暢銷書
- 5 “賓貢”小考
- 6 李鈺《百家詩話抄》小考
- 7 廓門貫徹《注石門文字禪》讀論
- 8 從朝鮮書目看漢籍交流
- 9 朝鮮時代女性詩文集解題

1 「東アジア文化イメージの形成と變遷——文學と繪畫における騎驢と騎牛を例に——」は、杜甫・孟浩然ら多數の中國詩人によって形成された驢馬に乗る文人のイメージが、高麗・朝鮮および日本においてどのように受容され、また變容していったかを、漢詩文作品および繪畫の作例を博搜・分析したものである。中國において騎驢とは、杜甫

や孟浩然の生涯と結びつき、騎馬（官吏・富貴）との対比で在野・貧困のイメージが付與され、政治性を強く帯びたものであった。これが高麗・朝鮮に入ると、現實生活において牛を移動手段としていたことから、むしろ「騎牛」が騎驢に取って代わり在野・脱俗のイメージを擔うようになるが、その政治性は保持・強化される。一方、繪畫においては傳統的畫題として騎驢圖が多數作られている。日本においては五山文學において騎驢のモチーフが愛用され、中國と同様のイメージが繼承されているが、そもそも日本には驢馬がないため、騎驢は完全に虚構の世界の産物であり、政治性が希薄になって、禪的レトリックを用いて貧困＝風流という方向に變化していく、とする。

一つのモチーフに着目して、その文學・繪畫兩者におけるイメージ形成を辿るというのは、地域・時代を限定しても非常に困難なことであるが、それを中・朝・日三國について、發生からほぼ終焉に至るまでをカバーした本論文は、その作業量の龐大さにまず壓倒される（五山文學については、騎驢を主題としない作品にまで目配りが及んでいることに驚

かされた）。結論も首肯されるものであろう。ただ、五山文學について、その非政治性を「もののあはれ」と結びつけるのはやや強引であろう。確かに中國・朝鮮との比較から言えば、日本文學全般に政治性が乏しく、その理由を求めるとそこに行き着いてしまうのは仕方ないことかもしれないが、五山文學が出家者（禪僧）による文學行爲であり、しかし室町幕府と緊密な關係があったという、相反する條件を踏まえた考察が求められるところである。

このような研究には中川徳之助「『白鷗』考」（『日本中世禪林文學論攷』清文堂出版、一九九九、所收。初出一九五七―七三）や朝倉尙『禪林の文學 中國文學受容の様相』（清文堂出版、一九八五。初出一九六八―八四）という成果がある。また美術史では島田修二郎・入矢義高監修『禪林畫贊 中世水墨畫を讀む』（毎日新聞社、一九八七）がまとまったものである。ただし前者は文學作品に限定されている。後者は美術史研究者が中心となって繪畫と畫贊とを合わせて讀解しようという初めての試みであったが、畫贊の讀解には問題も多く、近年再検討が行われているところである。すな

わち、文學と繪畫を合わせて検討するという方法は、漢文學分野においてはまだ緒に就いたばかりであり、その意味でも本論文は重要な成果であろう。

なお、杜甫の騎驢イメージについては太田亨「日本禪林における杜詩受容について——中期禪林における杜甫畫圖贊詩に着目して——」（『中國中世文學研究』四五・四六合併號、二〇〇四・一〇）に言及があり、「窮者而詩工也」（貧困から詩が生まれる）という言説に注目している。

本論文は全體をやや節略した形で石守謙・廖肇亨編『東亞文化意象之形塑』（臺北・允晨文化、二〇一一）に「東亞文學與繪畫中的騎驢與騎牛意象」として收められていて、こちらは圖版が豊富に添えられている。

2 「漢文學史上の一七六四年」は、この年（寶曆一四年（明和元年））に來日した朝鮮通信使と日本文人との交流が、その後の朝鮮文壇にどのような影響をもたらしたかを巨細に検討したものである。

通信使は一七世紀初頭から、原則として將軍の代替わりごとに派遣され、豊臣秀吉の侵略行爲によって傷ついた兩

國間の平和的通航を確認する一大行事であった。通信使たちは敵情視察の報告を兼ねて日録を記し、また文化交流として日本の學者・詩人と詩文の應酬や筆談を行った。日本側にとっては朱子學の先達に觸れる絶好の機會であり、またそこで文名を高めることが個人あるいは學派の名譽ともなっていた。朝鮮側は、正徳元年（二七一）の通信使を應接した新井白石ほかを例外として、概して日本の學藝全般を低く見ていた。それがこの寶曆の通信使によって一變し、高い評價を與えられるようになった。彼らの見聞や持ち歸った詩文集が流布し、日本漢詩のアンソロジーが編まれ、日本文人の風流が稱えられるほどになったのである。このことは彼ら自身の學藝への反省をもたらした。ひとつは自國の女性詩人への評價、もう一つは野蠻國と見なしていた清朝の學藝の價値の認識である。特に後者は、日本の學藝の進展が、長崎を通じて輸入された清代の著述の流布に原因があるとの認識に由來するものであった。逆に日本においては、朝鮮を對等もしくはやや劣等と見なす風潮が生まれつつあった。これがひいては近代のアジア觀につな

がるのではないか、と著者は見通しを述べて論を結んでいる。

本論文も、朝鮮・日本の関係文献を廣く見渡して、特に朝鮮文壇における反響をつぶさに検討している點に高い獨創性がある。江戸時代の漢文學においては、著者も指摘するように、荻生徂徠に始まる古文辭學派の臺頭がそれまでの學藝を一變させたと言つてよいだろう。江戸に據點があつた徂徠の弟子たちが、藩儒として、また市井の儒者として全國に散らばり、その學風を廣め、それに對する朱子學者の反發、あるいは兩者を折衷しようとする新たな動きが起つて、詩文・儒學ともに活性化してきたのがまさにこの一八世紀中葉であつた。そのことを朝鮮側資料から裏付けたという點において、日本漢文學研究にとつても貴重な成果である。

日本では高橋博巳氏が精力的にこの前後の日本・朝鮮・中國文壇の動向を追つていて、『東アジアの文藝共和國通信使・北學派・兼葭堂』（新典社、二〇〇九）および多數の論文をものしている。氏は文人同士の友情や共感を重視

した視點を持つている。その點、どちらかというと對立・摩擦（とその克服）という部分に注目する張氏とは異なるが、これは同じ事象の二つの面を示すものであろう。

なお、本論文は内山精也氏の翻譯により、淺見洋二氏と評者の編になる『蒼海に交わされる詩文』（東アジア海域叢書一三、汲古書院、二〇二二刊行豫定）にも收録される。ここに高橋氏も同じ通信使に關する論文を寄稿しているので併せて御覽頂きたい。

3 「朝鮮時代における女性詩文集の編纂と流布に關する文化史的考察」は、女性詩文集の編纂と流布の實態を追うとともに、それが何のために、またどのようにして行われたかを考察したものである。一六世紀末に始まる編纂行為の前提として、明末清初の中國における總集に、相當程度朝鮮女性詩人の作品が含まれていたこと、また中國人女性の作品が別集・總集ともに盛んに刊行されていたこと、を擧げる。それらの典籍が流入し、刺激を與えたとするのである。一方、内發的理由として、特に一八世紀後半以降の女性意識の自覺を指摘している。

ちなみに本書末尾に置かれた9「朝鮮時代女性詩文集解題」は、本論文の各論とでも言うべきもので、一六世紀から二〇世紀初頭に至る女性詩文集（別集・總集）三七種について、作者の傳記、所收作品の内容、傳本等詳細に記したものである。例えば許楚姬『蘭雪軒集』には、朝鮮版二本のほか、正徳元年（一七一）の和刻本があることも指摘している。これは8「朝鮮書目より見た漢籍交流」において、中國傳統の目錄學的方法によって朝鮮に流布した漢籍を検討したなかで、現代韓國および日本において作られた目錄も細大漏らさず觸れている（ただし藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究』京都大學學術出版會、二〇〇六、には言及せず）ことの副産物であろう。

なお、前近代日本の女性詩人については、大曾根章介「平安初期の女流漢詩人——有智子内親王を中心にして——」（『大曾根章介日本漢文學論集』二、汲古書院、一九九八。初出一九六九）や福島理子校注『江戸漢詩選二 女流』（岩波書店、一九九五）などが参考になるが、本書のような網羅的な紹介はまだ行われていない。

冒頭、序章に關連して、著者が掲げる三つの視點に觸れた。論文1はイメージの變遷を、論文2は人物の交流を、そして論文3は典籍の流傳を追ったものであり、いわば著者の考える域外漢籍研究の方法の具體的實踐になっている。

* * *

4「唐代の詩學流行書について」と5「賓貢」小考は、テーマとしては中國文學内部の問題であるが、『中國詩學研究』《全唐五代詩格校考》の專論がある著者ならではのものであろう。

4は唐代の初學者向け詩學書の流行に僧侶が大きな役割を果たしたことを述べる。著者に僧侶が多いこと、寺院が流布の場になったこと、詩學書の分析的敘述が僧侶の科判論（佛典本文の文脈分析）に由來することなど、いずれも重要な指摘であろう。それらの論證の支えになっているのが空海『文鏡秘府論』『性靈集』や圓仁の將來目錄といった日本の資料である。

5は、新羅を代表する詩人崔致遠が「賓貢」によって科

舉に及第した、という記述から説き起こして、この語の意味を追究し、外國人受験生の意である（ただし賓貢科として獨立しておらず、通常の進士科に屬する）と確定させたものである。こちらは『高麗史』『高麗史節要』等高麗の資料が大きな役割を果たしている。

6 「李鈺『百家詩話抄』小考」と7 「廓門貫徹『注石門文字禪』序説」は、それぞれ朝鮮・日本の文獻の考察で、中國典籍の域外における受容例を示したものである。

6 は、表題にある一八世紀後半の朝鮮文人の編著が實は『隨園詩話』の抄出であったことを指摘し、李鈺自身は袁枚の文學觀に共感していたが、當時の朝鮮文壇とは相容れないものだったため、架空の書名を付したと結論づけている。

7 は、北宋の詩僧として著名な覺範慧洪の浩瀚な詩文集『石門文字禪』三〇卷の注釋書である表題の書について、まず曹洞宗僧侶である著者廓門貫徹の傳記を述べ、その師友に獨庵玄光・卍山道白・無著道忠ら名だたる學問僧がいたことを指摘する。そして、久須本文雄、芳賀幸四郎、玉

村竹二、石川力山らの研究をふまえて中世禪林の學問の傳統を略述して、その流れの中に本書を位置付ける。ついで本書の引用文獻をその引用回数とともに列舉、四部あわせて三〇二種に及ぶことを明らかにする。一方で、同時代の詩學、特に語義考證の發達など、中世とは異なる學問の深化にも歩を合わせていると指摘している。

江戸時代における禪僧の學問上の達成については、無著道忠がよく知られているが、それも禪宗史内部での評價に止まるといつてよい。黃檗僧が江戸文化全體に及ぼした影響の大きさは、主として美術史の方面からの指摘に始まり、文學においては早く高橋博巳氏の著作で認知されるようになった（『京都藝苑のネットワーク』ペリカン社、一九八八。これとは別に、高橋氏の獨庵論については張氏も本書二六三頁に言及している）が、臨濟・曹洞に關しては、學際的研究に乏しい。近年では、建仁寺兩足院の高峰東峻について、住吉朋彦氏「高峰東峻の學績」（『文學』隔月刊、二二一五、二〇一一・九）が出たが、まだまだ埋もれている學僧、著作は數多いであろう。本論文は、そういった現狀に一石を投じ

たものと言えよう。

* * *

論文7は、『注石門文字禪』が禪學典籍叢刊五（臨川書店、二〇〇〇）に収録されたことを契機としている。評者もそれまで、不明にしてこの書の内容を知らなかった。影印や翻刻によってその存在を広く知らしめることが學問の推進に不可欠であることを示す好例であろう。そのことは著者自身が最も自覺する點であつて、『稀見本宋人詩話四種』

（江蘇古籍出版社、二〇〇二）『朝鮮時代書目叢刊』（中華書局、二〇〇四）『朝鮮時代女性詩文全集』（鳳凰出版社、二〇一一）、『注石門文字禪』（點校本、中華書局、二〇一二）といった資料刊行の努力が、本書のような研究と表裏一體となつて行われている。

朝鮮の漢文作品が『韓國文集叢刊』『韓國詩話叢編』という一大叢書に集成され、またインターネットを通じて閲覧できる態勢が整っていることが、著者を含めて全世界の研究者をどれほど助けているか、ということを考えれば、

やはり痛感されるのは、日本における資料整備の立ち遅れである。五山文學においては、『五山文學全集』『五山文學新集』やいくつかの叢書に含まれる作品、および未紹介・未紹介の作品の集大成、江戸時代においても『詩集日本漢詩』『日本詩話叢書』その他ではカバーできていない多くの版本・寫本を集成・紹介すること、こういう基礎的作業も、研究と同時に並行ですすめなければならない。その仰ぐべき手本がここにある、というのが本書を通覧しての實感である。

以上、燕雜な紹介に終始した。専門外の事柄も多く、読み違い、読み落としも多いことと思うが、日本漢文學研究という一視點からの評としてご容赦願いたい。

なお、本書末尾には徐雁平氏による著者へのインタビューをもとにした域外漢籍研究の経緯や現況が述べられていることを付言する。

（域外漢籍研究叢書第二輯、中華書局、二〇一二年、A5判四四六頁）